

# ねりまの文化財

「千川上水展」講演会抄録

## 千川上水と人々のくらし

豊島区立郷土資料館学芸員 伊藤 暢直先生

(二月三日に実施した「千川上水展」講演会の内容を文化財係の責任で抄録したものです)

千川上水は玉川上水の分水で、素堀部分  
は分水口(現武蔵野市境)から巢鴨ま  
での二キロメートルである。そのかな  
りの部分は練馬区であり、皆さんにとっ  
て千川上水は身近な存在であるかと思  
う。本日は千川上水の歴史についてお話を  
したい。

徳川家康が江戸に入府し、大名屋敷な  
どができるに飲み水が必要となり、神田  
上水・玉川上水が開さくされた。その後、  
江戸の市域はますます拡張し、両上水か  
らの供給だけでは飲み水が不足するよう  
になり、一六六〇年代に青山上水・龜有  
上水・三田上水が開さくされた。これら  
とは少し時代の下った元禄九年(一六九

六)に千川上水は開さくされた。

千川上水の開さくは徳兵衛・太兵衛ら  
が請け負い、その後、両家は千川の姓を  
賜わり、その子孫が上水の管理に当たっ  
た。千川姓の来歴については、徳兵衛・  
太兵衛が多摩郡仙川村(現調布市・三鷹  
市)出身の農民なので、千川上水と名づ  
けられそれに因んだ名字を賜ったという  
説もある。しかし、千川家の由緒書に、  
徳兵衛の先代源海は播磨国姫路(現兵庫  
県姫路市)出身と書かれている。徳兵衛  
は屋号を播磨屋と称し、宇治川、新大和  
川の護岸工事を請け負っており、必ずし  
も江戸を拠点とする人間ではなかったと  
言える。また上水の開さくには、土木工

会 員 課  
教 育 係  
練 馬 区 豊 島 区  
社 会 教 育 係  
(文 化 財 係)  
☎ 3993-1111 内線7141  
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

事に関するある程度  
の見識が必要であっ  
たと思われる。した  
が、徳兵衛を仙  
川村の農民と考える  
よりは、江戸・上方  
で土木請負業をな  
りわいとすると考  
える方が説得力がある。

千川上水開さくの主目的は、五代將軍  
徳川綱吉が御成りする湯島聖堂、上野寛  
永寺、小石川白山御殿、浅草寺御殿への  
給水であったが、小石川・本郷・下谷・  
浅草の町家などへも飲み水として一部が  
給水された。巢鴨から先は地中に木樋を  
埋めて江戸の市中に水が運ばれた。江戸  
市中の上水の遺構としては、大名屋敷に  
上水を引き込んだ施設が真砂遺跡(文京  
区本郷)から発見された程度であり、江  
戸市中へどのように給水経路がはりめぐ  
らされていたかは不詳である。但し、後  
述する千川水道株式会社が東京府に差し  
出した明治期の経路図が残っており、こ  
れと大差がなかったものと推察される。

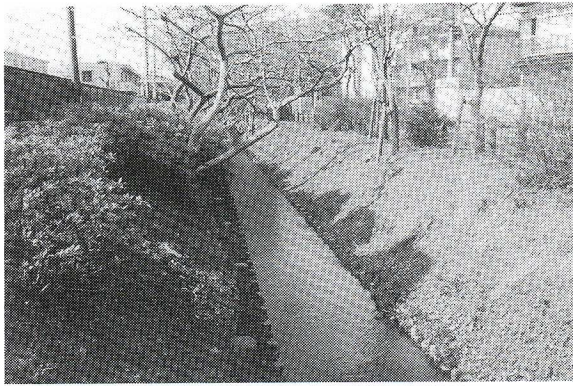
農業用水としての利用は、流域二〇ヶ  
村から嘆願があつて宝永四年(一七〇  
七)に初めて実現した。千川上水の江戸  
市中への給水は、享保七年(一七二二)  
廃止、安永八年(一七七九)再興、天明  
六年(一七八六)再び廃止と興廃を繰り返

返したが、この間も灌漑用水としての利  
用は継続し、現在でいう練馬区・杉並区  
・中野区・新宿区・豊島区・板橋区・北  
区の村々で利用された。上水の水は、こ  
れらの村々へ分水路を作り流された。千川  
上水から直接分かれている分水は十九本  
であった。

このように千川上水は主に農業用水と  
して利用されていたが、本流には水車が  
設けられ明治初期には八つの水車が稼働  
していた。上流部の水車は伸銅業に利用  
されたのに対し、下流部の水車は製粉・  
精穀の動力として利用される傾向にあつ  
た。



昭和27年頃の千川上水(中村北付近)



流れが復活した千川上水 (関町南付近)

近代以降は、工業用水も含めた産業用水一般として千川上水の水は利用された。幕末に滝野川反射炉(現北区)で大砲を製造するため、砲身に穴をあける錐台水車の動力として千川上水の水を使う話があり、王子分水の延長・拡幅工事が行われた。明治になり反射炉が不要になると、鹿島万平がその跡地に紡績工場を造り、上水の水を使用している。また、明治初期から王子製紙や大蔵省抄紙局(現王子製紙)がやはり上水の水を工業用水として利用している。明治十三年(一八八〇)、千川水道株式会社(現岩崎弥太郎)を中心に設立され、上水の水は再び飲み水として利用された。給水地域はほぼ江戸時代と同じであった。

しかし、近代水道が普及する明治四〇年(一九〇七)に会社は廃止され、上水としての利用は終わった。また、郊外の方も農地の減少に伴い、徐々に農業用水としての利用が少なくなり、工業用水としての使用が中心になりはじめた。

軍需工場である陸軍造兵廠火薬所でも明治三三年(一八九〇)から、上水の水を利用している。昭和戦前期には火薬所での使用が増え、水が足りなくて石神井川の水を導水し、現在の東京都税務事務所(豊玉北六一三)の所で汲み上げた。

近代は上水的美観が整えられた時期でもあった。大正期に、大正天皇の即位を記念し上水堤に桜が植えられ、人々の目を楽しませるようになった。桜台付近は、当時桜の名所であった玉川上水の小金井にあやかり「新小金井」とよばた。

戦後の千川上水の推移は、暗渠化され、道路になる過程と行ってよい。昭和二六年(一九五二)王子製紙の後身にあたる十條製紙が水利権を放棄し、昭和四六年(一九七二)大蔵省印刷局も取水をやめ、上水の通水は止まった。

しかし、現在は東京都の清流復活事業が行われ、流れが復活した。上流部は昔の景観を残している場所もあり、暗渠化された場所も道路や歩道になり、現在でも辿ることができる。是非とも千川上水跡のフィールドワークをお勧めしたい。

郷土資料室収蔵品シリーズ 第24回

御膳籠

大正の時代が終わる頃、その役目を果たし終え、七十年余りも蔵の中で静かに眠っていた竹製の蓋付き籠。その名を「御膳籠」といいます。

御膳籠は、儀式や行事の際の荷物運搬に用いられてきた籠です。

箆目編みで、外観も美しく、見るからにしっかりと作られています。

籠の底には、孟宗の丸竹でできた脚があり、これに麻綱が通っています。天秤棒に吊るして運ぶための綱です。

蓋は、本体の内側に、しっかりとはめ込むように作られています。

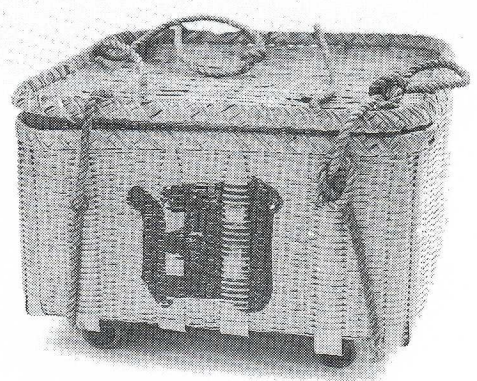
籠の側面には、屋号が黒々と大きく描かれており、どの家の御膳籠かが、遠目にもはっきりとわかるようになっていきます。

結婚に係わる一連の儀式は、御膳籠の大事な出番でした。

「結納」に赴く婿方の仲人は、帯代(支度金)と角樽の他に、昆布・鯉節・

するめ・米・末広等おめでたの品々を一対の御膳籠に収め、これを若い衆に天秤棒で担がせて、嫁方へ納めに行きました。

結婚式当日の午前中に行われた「荷物送り」にも、箆目・長持・欵箱・釣台と共に、食べ物を入れた御膳籠が行列に加



わりました。

七五三の祝いにも御膳籠が登場します。

昔は第一子の七才祝いを特に盛大に行う風習がありました。氏神様にお供えする餅やみかん等を御膳籠に入れて参拝します。その後、境内に集まってきた人々にこの餅やみかんがまかれました。

祝いの他にも、花見のご馳走を御膳籠に入れて運んだことが、江戸後期の書物『遊歴雑記』の中の「練馬下田柄の池」と題した文中に見ることが出来ます。

この御膳籠は、裕福な家で使われたものです。どの家でも使ったという物ではありませんが、大正の頃まで練馬周辺に続いていた、民俗習慣の一端を今日に語ってくれる民具であるといえましょう。

## 川北遺跡第2地点 の発掘成果から

地中に眠っている埋蔵文化財は、過去の人々の息吹を伝える歴史的資料であるとともに、私たちが後世に伝えてゆくべき貴重な共有財産でもあります。区教育委員会では、やむをえず開発によって遺跡が破壊されてしまう場合は事前に発掘調査を行うなど、埋蔵文化財の保護を図っています。

平成七年四月から七月にかけて発掘調査が行われた、川北遺跡(関町北四―二一)の発掘調査報告書がこの度刊行されました。調査は施設建設により遺跡が失われてしまったため、工事前に調査を実施し、遺物の記録をとるため実施されました。旧地名である「川北」に因んで、遺跡名が名付けられています。川北遺跡は別の場所でも発掘調査が行われており、今回は第2地点ということになります。遺跡は富士見池周辺に広がる遺跡のひとつで、石神井川の左岸の台地上にあります。

調査では、旧石器時代、縄文時代早・中期の遺構・遺物が発見されました。旧石器時代の遺構・遺物は関東ローム層中で三時期の生活の跡が確認されています。石器は黒曜石や、緑青色のチャートなど

を材料としており、ナイフ形石器が出土しました。チャートは石神井川や多摩川から採集されるものと同じです。

縄文時代の遺構は、竪穴住居址一軒、陥穴一基、炬穴三基、集石土坑六基、ピット、土坑などを確認し、遺物は縄文時代中期を中心とする土器や石器などが出土しています。竪穴住居址は直径三・四メートルほどのやや小振りな住居址で、屋内に炬が設けられたものです。住居内からは、縄文時代中期の阿玉台式土器と呼ばれる土器が、ほぼ完全な形に復元できる状態で出土しました。竪穴住居址の時期も、この土器より縄文時代中期のものと同定できます。この土器を伴う竪穴住居址は区内では例の少ないもので、注目される資料です。

この竪穴住居址とほぼ同じ時期に、狩りのためのものと思われる陥穴が掘られています。陥穴の深さは二・三メートルほどもあり、調査でも梯子を使わなければ昇り降りできないほどの深いものでした。穴は間口が広く、底にゆくに從って狭くなっていく形状で、落ちた獲物が這い上って来られないような工夫がなされています。

また、竪穴住居址よりも前の時期のものとしては、地面を掘りくぼめて火を焚いた跡である炬穴や、穴の中で握り拳ほどの石を熱して、蒸し焼きなどの調理を

した跡と考えられている集石土坑などがあり、これらの遺構は縄文時代早期のものと考えられます。

旧石器・縄文時代より後の時代のものとしては、発掘調査前に板碑が一基、表面採集されています。板碑は緑泥片岩製で、刻字などから延文年間(一三五六―六一)に制作されたものと考えられます。また、江戸時代の陥穴も一基確認されています。

### 新刊頒布中!

本文で紹介しました川北遺跡第2地点の報告書を頒布しています。図書館でもご覧になることができます。

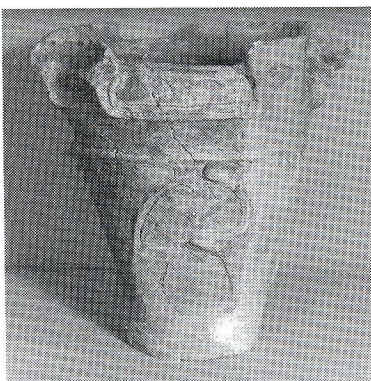
▼書名 東京都練馬区川北遺跡第2

地点調査報告書

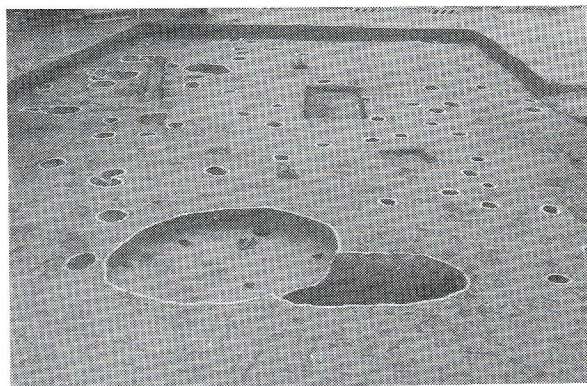
▼価格 二二〇〇円

▼頒布窓口 区民情報ひろば(区役所本

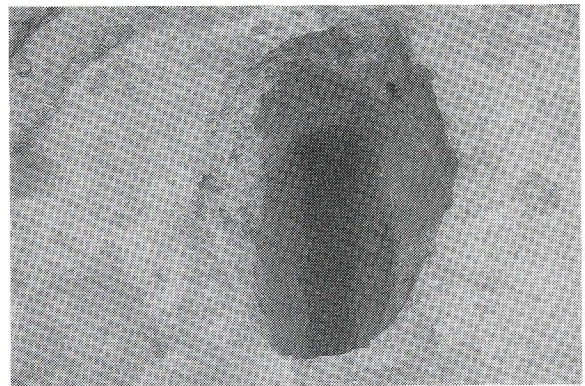
庁舎二階)、郷土資料室



阿玉台式土器



縄文時代の遺構



縄文時代の陥穴

## 関のポロ市

文化財保護推進員 井口 敏

石神井周辺の寺院では昔から行われていた大きな行事がいくつかありました。長命寺の市、三宝寺の馬駆け、本立寺のお会式と関の市です。

三宝寺の馬駆けは昭和の初め頃まで行われていました。かつて農家で馬を飼育し農産物や下肥の運搬に使っていましたが、いつしか運搬の主役は馬から牛に代わってしまい、馬が集まらず馬駆けの行事は消えてしまった様に思われます。今回は、本立寺のお会式に伴い本立寺門前に立つ関の市(現在は関のポロ市という)についてお知らせします。

関町北四丁目にある法耀山本立寺は、石神井川北側の高台にある日蓮宗の寺です。毎年二月九日・一〇日にお会式が行われます。師走に入った寒い時期で、木枯らしの吹く年もあれば小雪の舞う年もあります。大変多くの人で賑わい、昨年は二万五千人の人出でした。

九日午後八時を過ぎる頃になると万灯講中の行列が寺に入ってきて来ます。中野区・杉並区・豊島区・練馬区・新座市・和光市などから、三十余の講中が参集して来ます。万灯講中が団扇太鼓や鉦を叩き、纏(振り万灯)を振り境内の石段を上っ

て来るさまは、まことに勇壮な風景です。太鼓や鉦の音は冬の夜空に響きわたり、境内や道路を埋めつくした人達は寒さも忘れず。

昭和初期まで、九日の朝は檀家の家もそうでない家も早朝から赤飯を炊いて親戚に届けたり、親戚の人を招いてご馳走したりしました。小学校は九日・一〇日の両日は午前中で授業を打ち切り、子供を家へ帰しました。子供達は学校にいても落ちついて勉強できなかったからです。お会式の日にはポロ市が立ちます。宝暦年間(一七五一〜一六四)頃から市が立つ様になったと伝えられています。

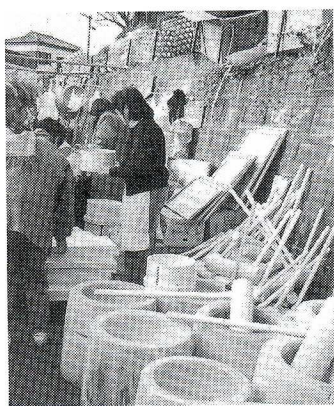
現在、境内及び門前の道路には三百軒近い露店が出店します。焼そば・お好み焼・たこ焼などの食べ物や売店、竹籠・笊などを売る籠屋、臼・杵・組板などを売る棒屋、鎌・鋸などを売る鍛冶屋、花鉢・盆栽・苗木を売る園芸屋、古着屋、古道具・古美術を売る骨董屋、こうした露店を見て歩くだけでも楽しいものです。ポロ市は毎年テレビに中継され、新聞に写真入りで報道されます。

昭和の初め、現在の東京女子学院が開校する以前は、そこが広場になっていて、見物小屋が四つ、五つ出ました。サーカス、オートバイの曲乗り、猿芝居、操り人形、眼鏡で覗く絡繰などの各々の小屋が賑やかに観客の呼び込みを行って

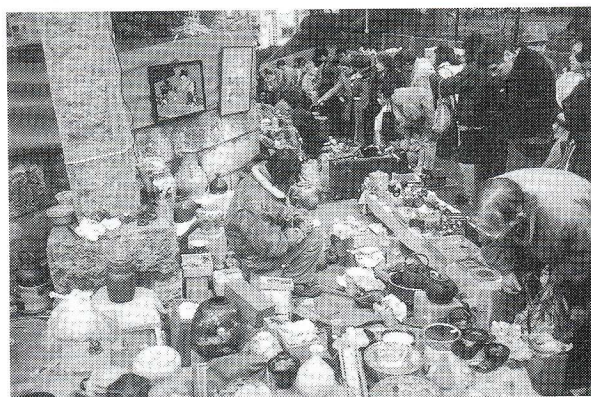
ました。サーカス小屋の音楽は賑やかな中にも、一抹の淋しさがあるメロデーで、いつまでも耳に残っていました。明治一八年(一八八五)頃、この広場では、野外七日間の相撲興行が行われました。

この頃、村人でその年に結婚した女性は花嫁衣装を着て姑に付き添われて本立寺に参詣しました。途中で知人に逢えば紹介され、嫁の支度(衣装など)を見せるといふ風習が続いていました。花嫁が何組も来るので、関のポロ市を花嫁市ともいいました。近在から人が集まるので未婚の若者には、結婚相手を探すのにはよい機会でした。

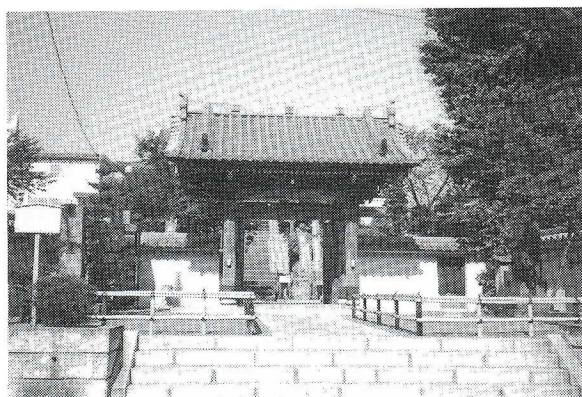
ポロ市の語源は関の市で古着屋から買った古着を裂いて草履の鼻緒を作ったことにあるといわれています。現在出ている古着屋は一軒ですが昭和初期には十数軒も出っていました。関のポロ市は平成二年二月、練馬区無形民俗文化財に登録されています。



棒屋



骨董屋



本立寺の山門